

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12388

研究課題名(和文) 分裂能格性の比較統語研究：名詞化と動詞の意味的特性を中心とした実証研究

研究課題名(英文) A comparative syntactic study of split ergativity: Evidence from nominalizations and the semantic properties of verbs

研究代表者

今西 祐介 (IMANISHI, Yusuke)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号：80734011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)： 研究期間全体を通しての主な研究成果は次のように纏められる。マヤ諸語、特にカクチケル語と喜界語の比較統語研究を中心に、分裂能格性が先行研究で主張されてきたような独立した規則から導かれるのではなく、各言語の統語的要因、特に異なる節タイプの統語的特性や語彙の意味的特性から派生される副次的な現象であることを示した。研究成果の一部を挙げると、マヤ諸語の名詞化と分裂能格性に関する学術論文が国際学術雑誌(Natural Language and Linguistic Theory, Springer)に掲載された。マヤ諸語と喜界語の分裂能格性に関する研究成果は単著(『言語の能格性』)として出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果をさらに精緻化することにより、自然言語の分裂能格性という複雑な文法メカニズムを広範囲に亘って説明できる理論を構築することが可能となる。その暁には、自然言語がなぜ多様な格・一致形態素配列を持ち得るのかという文法機能に関する積年の課題に対して、有力な解答を得られることが期待される。また、本研究が扱うマヤ諸語と喜界語は、ユネスコにより存続の危機に瀕する可能性が高い言語に指定されているため、これらを研究することは無形文化の重要な一部である言語の記録・保全に寄与するものと期待される。

研究成果の概要(英文)： I have shown that split ergativity found in Kaqchikel (Mayan) and Kikai (Ryukyuan) is derived from particular syntactic factors, but not from independent alignment rules. For example, I have proposed that the variation of alignment patterns in the accusative side of the ergative split of Kaqchikel, Chol and Q'anjob'al follows from a parametric difference between Kaqchikel and Chol/Q'anjob'al regarding nominalizations found in these languages. Parts of this work have appeared in international journals such as Natural Language and Linguistic Theory.

In addition, I have suggested that the active alignment pattern found in Kikai can be explained by the semantic properties of verbs. In particular, it has been shown that the volitionality of intransitive verbs correlates with the possibility of zero case-marking on their subject. Parts of this work have been published as the single-authored book titled Gengo-no Nookakusei.

研究分野：言語学

キーワード：(分裂)能格性 名詞化 活格性 一致現象 マヤ諸語 琉球諸語

## 1. 研究開始当初の背景

これまで研究代表者は自然言語の文生成メカニズムの解明に従事してきた。その中でも集中的に取り組んできたのは、マヤ語族に属するカクチケル語の能格性及び分裂能格性である。カクチケル語はユネスコの2010年の調査により、存続の危機に瀕する可能性が高い言語に指定されている。

本研究が中心的に扱うカクチケル語を含めたマヤ諸語は能格言語であり主要部有標型言語である。能格言語の特徴を具体的に述べると、自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同じ形(=絶対格人称標識、あるいはマヤ言語学では人称B標識と呼ばれる)を取り、他動詞文の主語だけがそれとは異なった形(=能格人称標識、あるいはマヤ言語学では人称A標識と呼ばれる)を取る(=能格性)。そして、これらの人称標識が文中の述語に表される(=主要部有標型)。それに対し、主格・対格型の日本語や他の多くの言語では、自動詞文と他動詞文の主語が同じ形を取り、他動詞文の目的語だけが異なった形を取る(=対格性)。

しかし、多くの能格言語は一貫してこのような形の能格性を示すわけではないことが、Silverstein(1976)やDixon(1994)等で報告されている。特に、分裂能格性と呼ばれる現象が多くの能格言語で観察されている。分裂能格性とは、一つの言語が能格性と対格性(あるいは他の格配列型)の両方の特徴を兼ね備えている状態を指し、以下では、特に、分裂能格性において現れる対格性のことを指す。そして、 Chol語やカンホバル語を含む多くのマヤ諸語においても、特定の時制・相で分裂能格性が見られるということが、Larsen and Norman(1979)、England(1983)、Coon(2010, 2013)等の研究によって報告されている。これらの言語では、完結相においては能格性を示すのに対し、進行相や未完結相においては対格性を示し、自動詞文と他動詞文の主語が能格人称標識を用い、他動詞文の目的語だけが絶対格人称標識を用いる。カクチケル語の場合、前掲のLarsen and Normanの先行研究等では、上述したマヤ諸語のような分裂能格性が見られないと分析され、それ故にあまり注目されてこなかった。

分裂能格性に関する重要な問いの一つは、分裂能格性は二つの異なる配列規則(能格型及び対格型配列規則)から導かれるのかということである。多くの先行研究(先述のDixonやSilverstein等)はこの問いに対して肯定的な立場を取ってきた。しかし、Laka(2006)やCoon(2013)等の最近の研究で明らかになってきたことは、分裂能格性を示すいくつかの能格言語は能格型配列規則のみを持ち、対格型配列等の他の様式は独立した配列規則から導かれるのではなく、各言語の統語的要因から副次的に派生されるということである。特に、LakaとCoonの研究が着目した要因は、対格型配列の環境に生じる名詞化(=主に動詞に接辞を加えることにより名詞を派生すること)である。同氏らは、能格言語にみられる対格型配列は名詞化節の統語的特性から派生されると主張した。しかしながら、LakaとCoonの主張はそれぞれバスク語、Chol語という二つの言語のみに基づいており、通言語的に当てはまる分析であるかは明らかではないため、他の能格言語の分析が強く望まれていた。さらに、LakaとCoonの分析では、名詞化の詳細及び多様性にはほとんど言及されていなかった。Alexiadou(2001)等の名詞化に関する研究では、名詞化は決して画一的な現象ではなく、言語間及び言語内において多様な統語的特性及び統語構造を有することが報告されていた。従って、能格言語の対格型配列に現れる名詞化がどのような統語的特性を持つのかを精査する必要があった。また、分裂能格性を説明するためには、名詞化以外の統語的要因も考慮する必要があった。その一つに動詞の持つ意味的特性があるが、活格型配列と呼ばれる様式と密接に関連している。活格型配列は、動

詞の意味的特性に応じて、自動詞文主語が他動詞文主語と同じ格標示を受ける場合（＝対格型配列）と他動詞文目的語と同じ格標示を受ける場合（＝能格型配列）があることを指す。活格型配列に関しては、北米アメリカ先住民諸語等の特定の語族の研究が中心であったため、他の言語グループからのアプローチが強く望まれていた。

## 2．研究の目的

本研究の目的は、今まであまり体系的に研究されてこなかったマヤ諸語内及びマヤ諸語と他の能格言語や琉球諸語である喜界語の比較統語研究を通じて、分裂能格性の発生メカニズムを解明することにより、能格性研究に新たな視座を加えることである。具体的には、分裂能格性が先行研究で主張されてきたような独立した規則から導かれるのではなく、各言語の統語的要因、特に名詞化節の統語的特性と動詞の意味的特性から派生される副次的な現象であることを明らかにすることを目指した。

## 3．研究の方法

本研究は、上述の研究目的を達成するために、カクチケル語に見られる特異な分裂能格性の特性と分布を詳細に記述し、それらの分析を行った。その際に、カクチケル語を他のマヤ諸語及び能格言語と比較することで、カクチケル語のみならず多くの能格言語で見受けられる分裂能格性にまつわる問題を体系的に説明できる形態・統語理論を提示した。また、本研究では、分裂能格性の観点からほとんど分析されることがなかった喜界語を研究対象とし、当該言語が活格型配列を持つかどうかを検証した。

具体的には、1年目と2年目は、これまでのフィールドワーク調査で蓄積されたカクチケル語のデータの整理・分析と他の能格言語の文献調査を行いながら、グアテマラでの新たなフィールド調査の準備を進めた。また、比較統語的観点からこれらの言語の理論的分析も行った。同時期には、喜界島において喜界語のフィールド調査も行った。3～4年目は新型コロナウイルス感染症拡大のため、フィールド調査を実施することができなかった。そのため、文献研究に加え、それまでの研究で明らかになった分析の問題点を修正するための理論研究を行った。さらに、フィールド調査を実施できない状況が続いたため、マヤ諸語の一致形態素に類似した特徴を持つ日本手話の研究を併行して行うことで、比較統語研究を進めた。5年目には喜界島でのフィールド調査を再開することができ、喜界語の活格型配列に加え名詞化やエビデンシャリティーの研究を行った。6年目は前年同様、喜界語のフィールド調査を行ったのに加え、メキシコでの情報収集も実施した。カクチケル語を含めマヤ諸語の母語話者研究者と意見交換をすることができ、有益な助言を得られた。

## 4．研究成果

研究代表者がこれまでに集中的に取り組んできたのは、カクチケル語を中心としたマヤ諸語の分裂能格性に関する比較統語研究である。これまでの研究により、以下の【表1】で示すように、カクチケル語は Chol 語や Kanjobal 語とは対照的な対格型配列を示すことを突き止めた。

【表 1：マヤ諸語の対格型配列における能格・絶対格人称標識と文法関係の対応】

	チョル語・カンホバル語の対格性	カクチケル語の対格性
自動詞文主語	能格	絶対格
他動詞文主語	能格	絶対格
他動詞文目的語	絶対格	能格

表 1 のようなマヤ諸語の対格型配列は名詞化節を伴うのだが、研究代表者がカクチケル語の異なるタイプの名詞化節（具体的には、補分標識を伴う節主語）を考察したところ、能格人称標識が（自動詞・他動詞文）主語、目的語の両方を標示することができる環境が存在することが明らかになった。具体的には、節主語内の複数形名詞が、ある統語的条件（以下に詳述）が揃った際に、節境界を越えて主文動詞と一致関係を結ぶというものである。また、複数形名詞が節主語内の主語か目的語であるかどうかに応じて、能格人称標識が標示する文法関係が変化するということが分かってきた。

また、本研究により、表 1 に示したカクチケル語の対格型配列に生じる名詞化節内には外項が現れることができないことが分かってきた。この統語的特性に対して説明を与えるために着目したのが動詞アスペクトと名詞化の相関関係である。Cornilescu (2001) は、ルーマニア語における限界的 (telic) 動詞を基にした名詞化節内では、外項が除外され内項が要求されることを指摘した。Alexiadou et al. (2010) の研究は、ドイツ語等の名詞化においても同様の相関関係が見られることを示している。研究代表者は、予備調査を通して、名詞化節に関して、カクチケル語がルーマニア語等と類似した特性を持つ可能性を指摘した。

さらに、英語やヘブライ語等の名詞化に関する先行研究を調査しながら、カクチケル語との比較研究も行った。特に、英語等で観察される agent exclusivity effect に着目することにより、カクチケル語の名詞化における外項に関する制約を原理的に説明できるメカニズムの検討を行った。英語やヘブライ語の名詞化においては、イベント構造に関する制約が agent exclusivity effect を引き起こす要因であると指摘する分析があるため、カクチケル語への応用可能性を検討した。また、名詞化節内における特定の動詞機能範疇の有無と外項生起可能性との相関関係に着目する分析があるため、カクチケル語にも同様の相関関係が見られるかを検証した。

喜界語の活格性に関して、研究代表者はこれまでの研究を通して、ゼロ格の分布が活格型配列（以下に詳述）に類似していることを突き止めた。特に、自動詞の意志性が低いほどその主語は他動詞文目的語（= ゼロ格）と同じ格標示を受け、意志性が高いほどその主語は他動詞文主語（= -ŋa/nu）と同じ格を持つ傾向にあることが分かった。さらに、動詞の意味的特性に加え、発話状況が喜界語の格配列に関与している可能性が明らかになった。

以上に加えて、喜界語におけるエビデンシャリティーの研究も行った。当該現象は名詞化を伴うため、マヤ諸語の名詞化との比較をする上においても重要だと判断した。さらに、日本手話における文末指さしの統語的側面の調査を実施した。文末指さしは、マヤ諸語の能格性において重要な役割を担っている一致形態素に類似していることから、当該現象の理解は比較統語研究に新たな視座を加えると考えた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Imanishi, Yusuke	4. 巻 38
2. 論文標題 Review: Composing Questions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 164-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yusuke Imanishi	4. 巻 -
2. 論文標題 On the connection between agreement and NP-ellipsis: Evidence from Kikai (Ryukyuan)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『英語学の深まり・英語学からの広がり』	6. 最初と最後の頁 208-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Imanishi, Yusuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Parameterizing split ergativity in Mayan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Natural Language and Linguistic Theory	6. 最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11049-018-09440-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Imanishi, Yusuke	4. 巻 73
2. 論文標題 The clause-mate condition on resumption: Evidence from Kaqchikel	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studia Linguistica	6. 最初と最後の頁 398-441
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 今西祐介
2. 発表標題 Some remarks on agent exclusivity in nominalization
3. 学会等名 関西言語学会第47回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Heffernan, Kevin and Yusuke Imanishi
2. 発表標題 Ongoing change in noun elaboration via bound suffixes in written Japanese
3. 学会等名 日本言語学会第165回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内堀朝子・今西祐介
2. 発表標題 日本手話の文末指さしが指すものを調べる
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会シンポジウム第6部門『手話言語研究の実際』（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今西祐介
2. 発表標題 日本手話の文末指さしに関する統語的研究
3. 学会等名 関西学院大学手話言語研究センター研究成果報告会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今西祐介
2. 発表標題 Evidentiality in Kikai
3. 学会等名 琉球諸語理論言語学研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Imanishi, Yusuke
2. 発表標題 A bound pronoun feeds long-distance agreement in Kaqchikel
3. 学会等名 The 7th Form and Analysis in Mayan Linguistics（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 今西祐介
2. 発表標題 音声言語と手話言語におけるエビデンシャルティーの比較統語研究 - 奄美語（喜界島方言）と日本手話を中心に -
3. 学会等名 手話言語研究センター研究成果報告会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松岡和美・内堀朝子・浅田裕子・今西祐介・上田由紀子・岡田智裕・坂本祐太・相良啓子・下谷奈津子・高嶋由布子・富田望・平山仁美・前川和美・矢野羽衣子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 『手話言語学のトピック：基礎から最前線へ』「文末指さし」（分担執筆）	

1. 著者名 今西 祐介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 言語の能格性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------